



一杯の恩恵に感謝して

荒木 勝利

私は、74歳、年金生活者、任意医療保険非加入。26年6月ダ・ビンチロボット（手術支援ロボット）による前立腺全摘手術のため12日間入院をしました。病室は相模大地に聳える近代建築物の8階、6人の大部屋です。入院当日は、各種書類の作成、担当 Dr・手術スタッフのレクチャー等で暮れました。翌13日9時、緊張して4階の手術場へ。入口で昨日の手術説明の看護師さんと本人確認の対話があり、すっかりリラックスして処置台へ上がりました。そして、あっという間の6時間、気がついたら8階の回復室でした。暫くして「手術は計画どおり、経過は順調です」との担当 Dr の説明を聞き、合掌して「ありがとうございました」と申し上げました。

翌日からリハビリ開始です。看護師さん達は、1日に何回か交代勤務し、何時も忙しく働き、同室のどの患者さんにも〇〇さんお食事ですよ！等、明るく声をかけてくれました。お通じあった、と云っては一緒に喜んでもらい、廊下で散歩中も「点滴取れたの、良かったねー」と手を上げてくれました。マスク越しに見える温かい目は、鋭い観察眼でもありましょ。手術後8日目の夕食時、ご飯の美味しさが戻ってきました。味覚の復活です。彼女達にとっては、何時もの事なのでしょ。自分事のように喜んでくれ、「嬉しい力」が湧いてきます。素晴らしい看護スタッフに巡り合えた幸せに、心から感謝いたしました。

私のベッドは、8階の窓際にありました。広大な視界の一面が大空・無限のスクリーンです。このスクリーンに最初に母を映しました。色白の大柄な母親は57歳で、66歳で逝った厳格な父、優しい祖父母との思い出は尽き

ません。そして、妻との巡り合い、妻の親族との画像。時間は十分あり次々に投影しました。

ご先祖様との限り無い関わりの機会に恵まれ、その善き因縁と大きな恩恵の中に生かされている自分、一杯の不思議に触れることが出来ました。

今後はこの喜び、体験を他に語り、恩返し的一端に、と心しているところです。

